

# 平成29年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成29年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 キアンコウ

学名 *Lophius litulon*

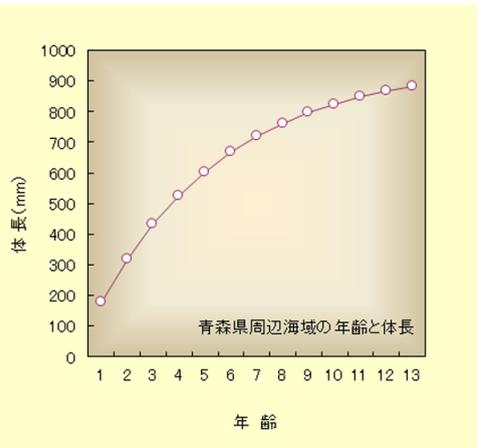
系群名 太平洋北部

担当水研 東北区水産研究所



## 生物学的特性

寿命： 不明  
成熟開始年齢： 不明  
産卵期・産卵場： 4～6月（津軽海峡東部沿岸）、5～7月（仙台湾周辺）、4～8月（福島県中部海域）  
食性： 青森県沿岸では、魚類、頭足類、福島県沖では、甲殻類、サラサガジ、エゾイソアイナメ、カレイ類、タラ類、イカナゴ、ギシアナゴ、カタクチイワシなど  
捕食者： キアンコウに対する捕食事例として、青森県沿岸のミズウオの胃内容物中に若齢個体の出現が認められている

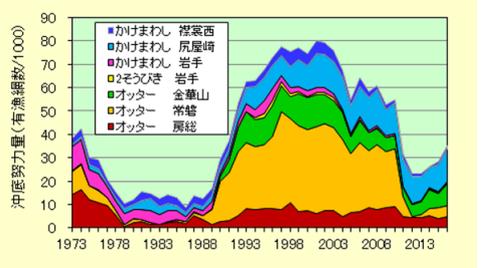
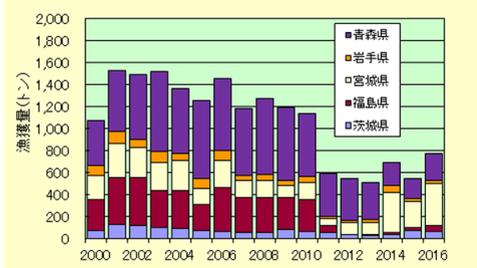


## 漁業の特徴

キアンコウは太平洋北部海域では沖合底びき網漁業（沖底）、小型底びき網漁業（小底）を主体に、底刺網漁業や定置網漁業でも漁獲されている。全体の漁獲量の内訳をみると、沖底の割合が最も高く、2016年は沖底、小底、その他漁業種（刺網、定置網など）の割合はそれぞれ59%、13%、28%であった。尻屋崎～襟裳西海区および金華山～房総海区が主漁場である。

## 漁獲の動向

漁獲量は、2000～2010年の間1,100～1,500トンであったが、近年は減少傾向にあった。しかし、2016年は東日本大震災（震災）の起こった2011年以降における最高値である772トンとなった。2011年以降の漁獲量の減少は、震災による操業休止の影響で努力量が減少したことも大きい。福島県では震災のために2012年は漁獲量がなかったが、2013年に試験操業の対象となってから漁獲量は徐々に回復している。

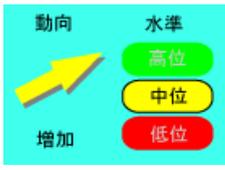


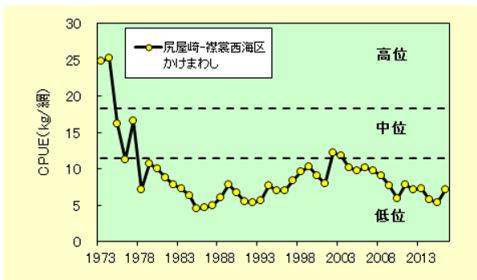
## 資源評価法

尻屋崎～襟裳西海区と金華山～房総海区ごとに、沖底の単位努力量あたり漁獲量（CPUE）によって資源の水準と動向を判断した。尻屋崎～襟裳西海区は襟裳西および尻屋崎海区を合計したかけまわしの1973～2016年のCPUEを指標値として用い、金華山～房総海区は金華山、常磐および房総海区を合計したオッターロールの同期間のCPUEを指標値として用い、海区ごとに資源状態を判断した。

## 資源状態

尻屋崎～襟裳西海区のCPUEは近年減少を続けている。同海区のCPUEの最大値と最小値を3等分し、18.3kg/網以上を高位、11.4kg/網未満を低位とし、2016年の同海区のCPUEは7.2kg/網であることから水準は低位、直近5年間（2012～2016年）の推移から動向は横ばいと判断した。金華山～房総海区のCPUEは震災以降増加傾向にある。同海区のCPUEの最大値と最小値を3等分し、12.2kg/網以上を高位、6.6kg/網未満を低位とした。2016年の同海区のCPUEは17.7kg/網であることから水準は高位、直近5年間（2012～2016年）の推移から、動向は増加と判断した。両海域の資源水準と動向を同等に勘案し、本資源全体の資源水準は中位、動向は増加と判断した。





### 管理方策

資源水準に合わせた漁獲を管理目標とし、2つの海域ごとのABCを算定し、合算して2018年ABCを求めた。全体としては中位水準であると判断したが、尻屋崎～襟裳西海区は低位水準にあることから、尻屋崎～襟裳西海区の漁獲量を下げることが提案する。また、金華山～房総海区は高位水準にあることから、漁獲量が震災前より上昇する可能性があるため、努力量を適切な水準に維持することを提案する。

管理基準	Target/Limit	2018年ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの増減%)
0.8・尻屋崎～襟裳西海区Ct・1.12	Target	880	—	—
1.0・金華山～房総海区Ct・1.04	Limit	1,100	—	—

- ABC算定規則の2-1)により、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ で計算した
- Limitは管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量、Targetは資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量
- $ABC_{target} = \alpha \cdot ABC_{limit}$ とし、係数 $\alpha$ には標準値0.8を用いた
- 原発事故の影響により、福島県以外でも震災による影響を受けているため、漁船隻数、稼働日数に関する情報から、震災前である2010年を1として年別県別漁業種類別に稼働率を推定した
- 尻屋崎～襟裳西海区の $\delta_1$ には、0.8(低位水準における標準値)、Ctには2016年の青森県の漁獲量に稼働率を考慮した岩手県の漁獲量を合計した値を用いた
- 金華山～房総海区の $\delta_1$ には1.0(高位水準における標準値)、Ctには稼働率を考慮した2016年の宮城県と茨城県の漁獲量および2008～2010年の福島県漁獲量の平均を加えた値を用いた
- 尻屋崎～襟裳西海区の $\gamma_1$ (1.12)および金華山～房総海区の $\gamma_1$ (1.04)は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/I)$ で計算し、kは標準値の1.0とし、bとは、それぞれ、海域別の直近3年間(2014～2016年)のCPUEの傾きと平均値(尻屋崎～襟裳西海区:b=0.73, I=6.10、金華山～房総海区:b=0.67, I=15.15)である
- ABCは10トン未満で四捨五入した

### 資源評価のまとめ

- 尻屋崎～襟裳西海区の資源水準は低位、動向は横ばい。金華山～房総海区の資源水準は高位、動向は増加
- 両海区の資源水準と動向を同等に勘案し、太平洋北部系群としての資源水準は中位、動向は増加と判断

### 管理方策のまとめ

- 資源水準に合わせた漁獲を管理目標とし、2018年ABCを求めた
- 尻屋崎～襟裳西海区は低位水準にあることから、尻屋崎～襟裳西海区の漁獲量を下げることが提案する
- 金華山～房総海区においては、漁獲量が震災前より上昇する可能性があるため、努力量を適切な水準に維持することを提案する

執筆者：柴田泰宙・服部 努・成松庸二・鈴木勇人・森川英祐

資源評価は毎年更新されます。